

## 枕詞「トリガナク」考

福田 益和

### Etymology of the Old Japanese *makura-kotoba Toriga-naku.*

Yoshikazu Fukuda

#### (一)

万葉集初出の枕詞「トリガナク」について考えてみたい。この枕詞はそれ以前の文献には見えないようで、万葉集では巻2「九番の柿本人麻呂の長歌の中にあらわれる外、次にあげる通り計9事例をみることができる。

(1) …… 食す国を定めたまふと雞之鳴吾妻の国の御軍士を召し給ひて……

(2) 鶏之鳴東の国に高山は多にあれども朋神の貴き山の……

(3) …… 父母も妻をも見むと思ひつつ行きけむ君は鳥鳴東の国の……

(4) 鶏鳴吾妻の国に古にありける事と今までに絶えず言ひ来る……

(5) 息の緒にわが思ふ君は鶏鳴東方の坂を今日か越ゆらむ

(2—<sup>(註)</sup>一九九)

(3—三八二)

(9—二〇〇)

(9—一八七)

(12—三九四)

- (6) ……鷄鳴東の国の陸奥の小田なる山に黄金ありと申し給へれ…… (18—四九四)
- (7) 等里我奈久東を指してふさへしに行かむと思へど由も実なし (18—四三三)
- (8) ……四方の国には人さには満ちてはあれど登利我奈久東男は…… (20—四三三)
- (9) 等里我奈久東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み (20—四三三)
- ・右のうち、(1)～(6)にあらわれる「雞之鳴」・「鷄之鳴」・「鳥鳴」・「鷄鳴」の表記のものは、(7)～(9)の音仮名表記によつていずれも「トリガナク」と訓むことが確定できると考えられ、訓みそのものに異論をはさむ余地はないと思われる。この9事例の枕詞はまた、すべて「アヅマ(吾妻・東)」にかかつて居り、その枕詞としての定着と安定性を知ることができるのである。

しかし、これまで論じられて来た通り、枕詞「トリガナク」がなぜ「アヅマ」にかかつて行くかについては必ずしも明らかでなく、というより諸説紛々として収拾がつかないような感じすらする。小稿はそれ等の状況をふまえた上で「トリガナク」がなぜ「アヅマ」にかかるのか一つの見解を示そうとしたものである。

## (二)

枕詞「トリガナク」についてのこれまでの説を検討する前に、既に挙げた(1)～(9)の歌の作者・詠歌状況について簡単な注を加える。

(1)は柿本人麻呂の歌、「高市皇子尊の城上の殯宮の時」に作ったもの。(2)は丹比真人国人の作、「筑波岳に登りて」作ったとある。(3)は田辺福麿歌集所出、「足柄の坂を過ぎて死れる人を見て作」ったもの。(4)は高橋虫鷹歌集所出、「勝鹿の真間娘子を詠」んだもの。(5)は「悲別歌」の中の一首であるが作者は未詳。(6)は作者大伴家持、「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌」である。(7)は大伴池主の作、池主が家持に贈った戯れの歌四首の中の一首。(8)・(9)はともに大伴家持の作、兵部使少輔家持が「防人の別を悲しむる心を痛みて作」ったとある。

すなわち、柿本人麻呂 1 丹比真人国入 1 田辺福鷹歌集 1 高橋虫鷹歌集 1 大伴池主 1 大伴家持 3 作者未詳 1

となる。時代的には万葉のいわゆる第二期から第四期にわたって居り、枕詞「トリガナク」の語使用に関して作者に特に偏りがあるとは認められない(家持 3 を有意のものと認めることは無理だと思われる)。福井久蔵氏は「枕詞の研究と釈義」で各時代の枕詞とその「創始者」を考え、「萬葉時代の枕詞と創始者」の項で人麻呂を創始者とする数多の枕詞を列挙して居られる。「トリガナク」もそのなかの一つに入るのである。しかし、我々が「創始者」と呼称する時は、それ以前になく新しくはじめて創った人をさすわけであるから、氏のように数多の枕詞を十分の検証を経ずに人麻呂の創始にかかると考えるのは速断である場合もある。氏の「創始者」とされる基準は文献初出というところにあると考えられるが、文献初出をもってそのまま「創始者」とすることはできないであろう。人麻呂以前に誰かによって既に枕詞として用いられた可能性を決して否定することはできない。それがたまたま文献にあらわれなかった場合を想定し得るのである。万葉の「トリガナク」が既述の通り枕詞として定着し安定した用法をもっている状況からしても人麻呂以前に既に用いられた可能性を残している。ただ後述するように和珥氏の支族として人麻呂を位置づける時、この「トリガナク」の背景に和珥氏の伝承を考えるなら、人麻呂と「トリガナク」との関係は親密なものになる。しかしこの問題はいくら論じても先は閉ざされているのでこれ以上踏みこまない。

さて、「トリガナク」はなぜ「アツマ」にかかるのか、これまでの説を検討してみよう。

福井久蔵氏の<sup>(註 2)</sup>前掲書に載せられた説を中心にして以後の説もいくつかつけ加え、次のようにまとめた。

- (a) 東国(あづま)の言葉は解しがたく鶏の鳴くように聞えたので、「あづま」にかかる。〈日本古典文学大系「万葉集」〉  
(b) 暁、鶏が鳴くと東の方から赤くなつて行くので「東」に冠らせた。〈福井久蔵「枕詞の研究と釈義」、斎藤茂吉「柿本人麻呂」〉

- (c) 東南に天鶏がはじめて鳴くと天下の鶏皆なくなるところから。〈枕詞燭明抄(下河辺長流)、袖中抄(釈顯昭)、青葉丹花抄(釈由阿)〉

- (d) 鶏が鳴くぞやよ起きよ吾夫(あづま)という心で続くと思われる。〈万葉集枕詞解(鹿持雅澄)、澤瀉久孝「万葉の作

品と時代」、日本古典文学全集「万葉集」

(e) 鶏は夜のあか時になくから、明<sup>あか</sup>と言いかけた。「あづま」の「あ」は「あが」の「が」を略いたもので、そのもとの語の「あか」にかかる。〈冠辞考（賀茂真淵）〉

(f) 「あづま」の「あ」には「あく」の意があり、鳥は「あくる」を見てなくから。〈仙賞万葉抄、枕辞一言抄（賀茂季鷹）〉

(g) 鴉の鳴き声がああと聞えるので「あづま」にかかる。〈冠辞考続貂（上田秋成）〉

(h) あづは建築の一部の名処で、鶏がそこで時をつくるのであづを起した（あづは今のづしの類か）。〈折口信夫「万葉集辞典」〉

(i) 暁には雌が先に鳴き、次にこれを聞いて雄が鳴く。それで「鳥が鳴くあが妻」というのである。〈詞林采要抄（釈由阿）〉

(j) 鳥は友呼びかわして群とぶものだから鳥が鳴きあとむ（集むの義）と続くか。とむとつまとは同音。〈冠辞懸緒（楫取魚彦）〉

(k) あづの二音につづけたか。あづは顛れつづくこと果なしという義。鶏が鳴くと夜が明けて万物見あらわれつづくの意味。〈石上枕詞例（高橋残夢）〉

右の(a)～(k)の諸説を「トリガナク」に下接する「アヅマ」という語のどの部分にかかるかによって分類すると、

アにかかるとするもの……(f) (g)

アヅにかかるとするもの……(h) (k)

ア(ガ)ツマのア(ガ)にかかるとするもの……(e)

アヅマにかかるとするもの……(a) (b) (c) (d) (i) (j)

となる。右の中、アにかかるとする(f)(g)は付会に過ぎ説得力がない。アヅにかかるとする(h)(k)のうち(k)は無理、これも付会の印象はぬぐえない。(h)の折口信夫説は面白いが問題はアヅという語の認定が明確でないこと、また「トリガナク」

が「アツ」だけの語形にかかると考えられる確実な事例が一つもないことなどから採ることはできない。また、(e)のようにアガツマの語を想定し、そのアガにかかるとするのも無理な説明と思われる。

そうすると結局「アツマ」全体にかかると見るのが穏当であり、万葉の事例「トリガナク」が「アツマ」という語形のみにつづいているのもうなずけるのである。そこで「アツマ」全体にかかるとする見解について改めて眺めてみるに、(i)のように「鳴きあとむ」(とむ、つま同音)説は(e)とおなじく無理。(i)は雌雄の鳴く先後をもとにして着想の面白さはみられるがそれ以上には出ない。(b)(c)はほぼ同類の見解で、鶏鳴と東(南)の方向性を結びつけ、夜明けの印象からかかるとするのである。一応の説得力をもつ説である。次に(a)の見解であるが、「万葉集一」(日本古典文学大系)の補注によると、

「東国の言葉は新付の民の言語として低く見られていた。殊に母音の体系が大和地方と異なっていたのでその言葉は大和地方の人々には曲った言葉のように聞こえたのであろう。そこでトリガナクという枕詞が東にかかることとなったのである」

とある。つまり、東国の人々に対する都の人々の言語差別観がもとになり「トリガナク」ように理解し難いアツマの人々のことばという意味で、つづくというのである。たしかに洋の東西を問わずこうした言語観は古くからあったようで、英語の barbarian (野蛮人) という語が、もと言語や風習を異にする人々に対して用いられた語であることや中国の「南蛮駄舌」という語が、モズ(駄)の鳴き声のようなことばを話す人々に対して用いられていることなどが思いあわされる。わが国の場合でも、

「辺呪語呪 古経云 鬼神辺地語 佐比豆利」(新訳華嚴經音義私記)

の「サヒヅリ(佐比豆利)」が知られ、平安以後も「あまのさへづり」の語形で用いられたことは周知の通りである。「南蛮駄舌」・「佐比豆利」いずれも異域の人々のことばを鳥の鳴き声で形容しているところから見て、枕詞「トリガナク」も言葉の解し難いアツマにかかるのであるとすれば興味深い。しかし一方で次のような疑問もわいて来るのである。奈良時代に既に用いられた「サヒヅリ」がなぜ枕詞として「アツマ」にかからないのであろうか。この点がすっきりしない。「サヒヅリ」は万葉集に、枕詞として「サヒヅラフ」・「サヒヅルヤ」の語形で各1例あらわれる。すなわち、

- (10) 住吉の波豆麻の君が馬乗衣雜豆臍(さひづらふ)漢女をすゑて縫へる衣ぞ  
(7-173)
- (11) ……天光るや日の氣に干し佐比豆留夜(さひづるや)から碓子に春き……  
(16-1366)
- これらはいずれも「あや(漢)・」から(韓)の人々のことばが解し難い為枕詞となったものである。また、「サヒヅリ」のサヒと語源を同じくするか不明であるが「サヘク」の形式をふくむ「コトサヘク」(ことばが通じない意)という枕詞も2例ある。

(12) つのさはふ石見の海の言佐敝久韓の崎なる海石にぞ……  
(2-135)

(13) ……憶ひもいまだ盡きねば言左敝久百済の原ゆ……  
(2-199)

(12)・(13)とも人麻呂の歌にあらわれ、(13)は先にあげた(1)と同じ歌の中で用いられ、同一の歌の中に「トリガナク」・「コトサヘク」がいわば共存していることになる。この「コトサヘク」も「韓」・「百済」にかかり、その人々のことばの解し難さをもって連なったものと考えられる。これ等の事実から、「サヒヅラフ」・「サヒヅルヤ」・「コトサヘク」等の枕詞がありながらいずれも「アヅマ」にかかる事例がないところを見ると「トリガナク」という枕詞は東国の人々のことばの解し難さをもって「アヅマ」にかかるとする見解は受け入れることができないのである。

残った(d)については、鹿持雅澄が過去の諸説を論ずるに足らずとして、「こは、さは鶏が鳴ぞ、やよ起よ吾妻と云意につづくなるべし」として神楽歌や万葉集の類歌をあげ説明している。折口信夫氏は右の雅澄説を「面白いが近代的の考へらしい匂ひあり」として退け、澤瀉氏は雅澄説を継承してこの「素朴な解釈」によるべきものだとされる。折口・澤瀉両氏の見解は「近代的の考へらしい匂ひ」・「素朴な解釈」と対立するが、神楽歌や万葉集に示唆的な事例があるところから興味をひかれるのである。

以上、(a)・(k)について注記を加えたが結局のところ筆者にとっては(b)説(c)説はこれに含める)と(d)説が検討の対象となるべき価値を有しているものと考えられる。以下、万葉集の枕詞の表現構造、さらには記紀等の事例をも視野に入れ考察してみたい。

(三)

万葉集には「トリガナク」を初めとして鳥類を要素とする枕詞がいくつもある。以下それを列挙してみよう。<sup>(注3)</sup>

あさどりの	あぢむらの	いへつどり	うぐひすの	うづらなす	おきつどり	おほとりの	かもじもの	かりがねの
くろとりの	さかどりの	しながどり	しまつどり	しらとりの	とぶとりの	とりじもの	にはつどり	にほどりの
ぬえこどり	ぬえどりの	ぬつどり <sup>(2)</sup>	はますどり	はるどりの	ほととぎす	みづとりの	むらどりの	もちどりの
やさかどり	ゆくとりの	よぶこどり						

あぢのすむ　うづらなく　たづがなく　ちどりなく　とりがなく　まとりすむ　みさごゑる

以上である。前半にあげた30語の枕詞は音数律の關係から、鳥名のみ(11語)、鳥名+「ノ」助詞(16語)、鳥名+「ジモノ」(2語)、鳥名+「ナス」(1語)の四形式に要約することができる。一方、後半にあげた7語の枕詞は、「トリガナク」と同じ(または、それに準ずる)表現構造

主語+主格助詞(ガ・ノ助詞、主格無標示)+述語

を共有するものである。我々にとっては後半の7語を直接の考察の対象とすべきものである。これ等の枕詞がどんな語句にかかっているか、作者・事例等をも参照してあげると次の通りである。

(上段から順に、かかる語句、巻番号、作者名を示す)

(あぢのすむ)　2例

渚沙の入江の荒磯松

11―三三

不明

須佐の入江の隠沼の

14―三三

不明

(うづらなく)　4例

枕詞「トリガナク」考

福田益和

故りにし里ゆ

4 | 七五

家持

古しと人は

17 | 元〇

家持

古りにし里の

8 | 一五六

沙弥尼等

人の古家に

11 | 七九

不明

(たづがなく)

2例

奈呉江の菅の

18 | 四二六

家持

蘆辺も見えず

20 | 四〇〇

家持

(ちどりなく)

4例

佐保の河瀬の

4 | 五六

坂上郎女

佐保の河門の

4 | 五八

坂上郎女

み吉野川の川音の

6 | 九五

車持千年

(とりがなく)

9例……略

その佐保川に

6 | 九八

不明

(まとりすむ)

2例

卯名手の森の

7 | 三四

不明

卯名手の森の

12 | 三〇〇

不明

(みさこるる)

5例

磯回に生ふる

3 | 三二

赤人

荒磯に生ふる

3 | 三三

不明

沖の荒磯に

11 | 三七

不明

荒磯に生ふる

12 | 三七

不明



これ等の枕詞のかかる語句をみるに殆どが鳥の鳴く場所（渚沙の入江・故りにし里・奈呉江の菅・佐保の河瀬……等）をあらわす語であり、「古し」（17-三〇〇）などは例外とみられる。中でも、「トリガナク」と表現構造・意味ともにもっとも近い「たづがなく」、これに準ずる「ちどりなく」・「うづらなく」などの枕詞をみても、鳥の鳴く場所を示す語句についていることは注目してよいことがらと思われる。

次に、万葉集の枕詞で「ナク」という要素をふくむ主述構造の表現を調べると既出のもの（うづらなく・たづがなく・ちどりなく・とりがなく）以外には「かはすなく」があるだけである。この語は、万葉集では4例、「泉の里に」（4-六六六、石川広成）、「甘南備河に」（8-四三、厚見王）、「六田の河の」（9-七三、不明）、「吉野の河の」（10-六六、不明）とつづき、同様にそのナク場所を示す語であることがわかる。

#### (四)

ここで枕詞を離れて万葉集の歌にあらわれる「鳥の鳴くこと」にかかわる表現形式を考察してみたい。まず、

鳥〔主語〕＋主格ガ助詞＋ナク（それに準ずる語）〔述語〕

の表現形式は、

- (14) 多都我奈伎（鶴が鳴き）葦辺をさして飛び渡るあなたづたづし独りさ宿れば  
（15-三六三）丹比の大夫
- (15) ……大君の命かしこみ夕されば鶴之妻喚（鶴が妻呼ぶ）難波濁三津の崎より……  
（8-四三三）笠金村
- (16) 今朝の朝明秋風寒し遠つ人加里我来鳴牟（雁が来鳴かむ）時近みかも  
（17-三〇四）大伴家持

鳥〔主語〕＋主格ノ助詞＋ナク（それに準ずる語）〔述語〕

の表現形式は比較的多く事例数を主語にあたる鳥の種類によって分類すると、

うぐいす9 かりがね5 かり1 たづがね2 あしたづ1 かほどり2 ちどり1 かけ1 ももとり1  
となる。二、三例示すると、

(17) ……鶯乃来鳴(鶯の来鳴く) 春べは巖は山した光り錦なす花咲きををり……

(18) 夕霧に知杼里乃奈古志(千鳥の鳴きし) 佐保路をば荒らしやしてむ見るよしを無み

(19) ……百鳥能来居弓奈久(百鳥の来居て鳴く) 声春されば聞きの愛しも……

次に、

鳥(主語)+助詞無標示、副助詞ハ・モなど+ナク(それに準ずる語)(〔述語〕

の表現形式を前と同じく主語にあたる鳥の種類によって分類すると、

ほととぎす111 やまほととぎす3 うぐひす20 たづ14 かり4 かりがね7 ちどり8 よぶこどり3 きぎし2

さぬつどり1 かも1 うづら1 とり2 とりがね1 あさがらす1 かけ3

となる。「ほととぎす」が音数律の関係からかこの形式に集中している。「やまほととぎす」を加えると114例に達する(

右の中「トリガナク」により近い「とり」・「とりがね」について例示する。

(20) 冬ごもり春さり来れば鳴かざりし鳥毛来鳴奴(鳥も来鳴きぬ) 咲かざりし花も咲けれど……

(21) 古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴渡遊久(鳴きわたり行く) (1-12) 額田王 (2-12) 弓削皇子

(22) 妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥音異鳴(鳥が音異に鳴く) 秋過ぎぬらし (10-136) 不明

万葉人が鳥に対して深い愛着をもち、身近な動物として親しみ、それが右のような文学表現としてあらわれたものということが出来る。(三)の冒頭に示したように万葉集には鳥類を要素とする枕詞が多数あること、その中でも、身内意識をあらわすと考えられる「ガ」助詞が「トリガナク」をはじめ、「タツガナク」の枕詞や、枕詞の外にも「タツガナキ」・「タツガツマヨブ」・「カリガキナカム」のような主格助詞として用いられているのはこれ等の表現が万葉人の言語生活の上に定着して来た姿を示しているのであり、これ等の表現に支えられて「トリガナク」の枕詞は成立したものであるといえる。参考のため万葉集の枕詞にガ助詞の用いられたものをあげておきたい。(既出のものはのぞく)

あがこころ いもがいへに いもがかど いもがかみ いもがそで いもがてを いもがひも いもがめを きみがいへに こらがてを <sup>(9)</sup>すずがねの まつがねの わがいのちを わがせこを わがたたみ <sup>(9)</sup>あしがちる いもができる きみがきる

〈連体格〉  
〈主格〉

(五)

これまで万葉集にあらわれる鳥（特にその鳴き声）についての表現形式を眺めて来たが、ここで記紀（歌謡）に目を転じて見てみよう。「トリガナク」の枕詞を見出すことはできないが、鳥類を要素とする枕詞としては、

(23) 沖つ鳥（意岐都登理）鴨着く島に我が率寝し妹は忘れじ世の盡に（記上、火遠理命）鴨にかかる

(24) ……吾はや飢ぬ鳥つ鳥（志麻都登理）鵜飼が伴今助けに来ね（記中、伊波礼毘古命）鵜にかかる

(25) ……伊知遅島美島に着き鳩鳥の（美本杼理能）潜き息づき…（記中、応神天皇）潜きにかかる

(26) 天飛む（阿麻陀牟）軽の嬢女甚泣かば人知りぬべし波佐の山の鳩の下泣きに泣く（記下、皇太子輕王）軽にかかる

等が目につく。しかし、何といつても注目値するのは記（上）の、八千矛神が高志国の沼河比売に求婚する時の歌謡で、比売の家に到着した八千矛神は次のようにうたう。少し長いが全部引用する。

(27) 八千矛の神の命は 八島国妻枕きかねて 遠々し高志の国に 賢し女を有りと聞かして 麗し女を有りと聞こして さ

婚ひに在立たし 婚ひに在通はせ 大刀が緒もいまだ解かずて 襲をもいまだ解かねば 嬢子の寝すや板戸を 押そぶら

ひ我が立たせれば 引こづらひ我が立たせれば 青山に鵲は鳴きぬ さ野つ鳥雉は響む 庭つ鳥鶏は鳴く うれたくも鳴

くなる鳥か この鳥も打ち止めこせね いしたふや海人駈使 事の語り言も是をば

家の中に入れてもらえない八千矛神は夜が明けるのを気にしていると果たして「青山に鵲は鳴きぬ さ野つ鳥雉は響む 庭つ鳥鶏は鳴く」ことになり、腹いせに「鳴くなる鳥」にあたりちらすというコメディ風の歌謡で周知のものである。ここには一連の鳥の鳴くことの表現があらわれ、また「さ野つ鳥」（雉にかかると）、「庭つ鳥」（鶏にかかると）の枕詞がみられる。

そして、これをうけて沼河比売が、「……我が心浦渚の鳥ぞ 今こそは我鳥にあらめ 後は汝鳥にあらむを……」と自分を鳥にたとえてうたうのである。歌全体鳥のイメージでみちみちている。

これと類似の歌が日本書紀（継体天皇七年九月条）にもみえる。すなわち、勾大兄皇子が妃として迎えた春日皇女に対して唱ったもので、その後半部分をあげると、

(28) ……妹が手を我に枕かしめ 我が手をば妹に枕かしめ 真榮葛手抱き又はり 穴串ろ熟睡寝し間に 庭つ鳥鶏は鳴くなり 野つ鳥雉は響む 愛しけくもいまだ言はずて明けにけり我妹

先の八千矛神の歌と比較すると「青山に鶺鴒は鳴きぬ」が欠けたり、「(さ)野つ鳥」・「庭つ鳥」の順序が逆であったりして若干の異同はあるものの、勾大兄皇子は春日皇女と睦みあつて熟睡したが思いを十分伝えないうちに鳥が鳴き夜が明けてしまった、いという妻よ、という内容で、妻に後髪を引かれながら鳥の鳴き声にうながされて帰らねばならない通いづま(夫)の姿が両者とも共通のものとして表現の基盤にあるのである。(28)のうたの末尾が「……我妹」と呼称の形式であるのは注目すべきことで、これは「トリガナクアヅマ」を考える上で考慮すべきこと言うまでもない。

この表現形式が伝えられ、万葉集にも流れこんでいることも忘れてはなるまい。

(29) 隠国の泊瀬の国に さ結婚にわが来れば たな曇り 雪はふり来 さ曇り雨は降り来 野つ鳥雉はとよみ 家つ鳥鶏も鳴く さ夜は明けこの夜は明けぬ 入りてかつ寝む この戸開かせ (13-1310) 不明

右の歌は内容から見たら古事記の八千矛神の歌により近いことがわかる。一方で、右の歌が「隠口の泊瀬の国に……」と歌いはじめるのは、(28)の勾大兄皇子の歌に和した妃(春日皇女)の歌の冒頭「隠国の泊瀬の川ゆ……」とよく似て居り、歌謡圏の共通の基盤をうかがうことができる。

ここまで検討を進めて来て改めて思い出されるのは(二)で引用した雅澄の「万葉集枕詞解」が指摘する神楽歌・万葉集の事例である。それをあげる。

(30) 鶏はかけろと鳴きぬなり起きよ起きよ我が門に夜の夫人もこそ見れ (神楽歌)  
(31) わが門に千鳥数鳴く起きよ起きよわが一夜夫人に知らぬな (16-1673)

先の(27)と右の(30)(31)の歌には共通性を看取することができる。すなわち、いずれも妻問いの歌の形式を具有し、鳥の鳴く音に夜明けを気にしていることである。ただ、(27)と(29)は夫の方から妻に働きかけているのに対し、(30)(31)は妻の方から夫に働きかけているのであってそこが異なる点となっている。そこでこの「働きかけ」に注目してみよう。

(28)は、夫の方から妻に対して「愛しけくもいまだ言はずて明けにけり我妹(わぎも)」と呼びかけている。これに対して(27)は、同じく夫の方から妻に「心痛くも鳴くなる鳥かこの鳥も打ち止めこせね」と命令している。これを(28)の表現と対照すると、「……この鳥も打ち止めこせね(我妹)」と実質上同格で「我妹」の語が呼格表現として略されていると考えるもよい。(29)も夫の方から妻に「……入りてかつ眠むこの戸開かせ(我妹)」と働きかけていると考えられる。(27)と(29)はその表現形式に呼格表現としての「……我妹」の要素を共有しているものと認められる。

一方、(30)(31)は、妻の方から夫に働きかけて居り、(30)は「起きよ起きよ我が門に夜の夫」、(31)は「起きよ起きよわが一夜夫」と呼格表現が用いられている。

以上のことから、(27)(31)の歌(謡)には、

鳥が鳴くこと―夜が明けること―それを気にして夫(妻)に「わぎも・わがつま」と呼びかけ働きかけること

の三要素が存在(伏在)していることがわかる。この要素を具備した表現形式が古代歌謡の世界の中に脈々として流れていたと見るべきである。(27)は「海人馳使」の語より、海人部の伝承として伝えられて来たものであろうし、(28)は、和珥氏系の伝承によるという考えもある。<sup>(註5)</sup>折口信夫氏は柿本氏を和珥氏の支族とみられたが、<sup>(註6)</sup>もしそうであるなら枕詞「トリガナク」の文献初出が人麻呂であることを思うとききわめて興味深い。

## (六)

従属句・条件句の主語を示す「ガ」助詞の用法は古事記にも既に見え、例えば既出の(27)の八千矛神の歌にも「和何多々勢礼婆」(我が立たせれば)と用いられている。しかし、枕詞として認定されるものの中にガ助詞を求めても記(歌謡)に

は見出すことはできない。枕詞「トリガナク」のガ助詞は文構造の上からみた時は「アツマ」(体言)にかかるのであるから、従属句中の主格用法を示すがということができよう。問題はその「トリガナク」がなぜ「アツマ」にかかるかである。

(三)で検討した通り、万葉集の鳥にかかわる枕詞のうち、主語+(ガ)+述語の文構造をもつ枕詞の下接語句は、その鳥の鳴く場所を示すものが殆どであった。よって枕詞「トリガナク」のかかる「アツマ」もそのトリの鳴く場所(東国)を示すものと考えるのが穩当である。そこで「トリガナク」はなぜ場所(東国)を示すアツマにかかる枕詞になったのか。ここまでは考えて来た時、我々は海人部・和珥氏などによって伝えられた記紀・神楽歌・万葉集等にあらわれる求婚歌の三要素鳥が鳴くこと——夜が明けること——それを氣にして夫(妻)に「わぎも・わがつま」と呼びかけ働きかけることを当然思ひ出さざるを得ない。枕詞「トリガナク」の創始者は、右の三要素のうち第二番目の要素(夜が明けること)を省略し、第一番目の要素と第三番目の要素を直結させたと考えられるが、その際連想としてうかんだのがアツマの地名起源説話であったと推測される。日本武尊が妻(弟橘媛)を追慕して言ったという「吾嬬者耶」の語により「吾嬬国」と呼ぶようになったという周知のものである(日本書紀卷七・景行天皇)。この連想の過程で、

人(わぎも、わがつま)↓地名(東国)

の転換が行われ、「東国」を意味する「アツマ」にかかる枕詞として「トリガナク」が成立したと考えられる。要するに、地名「アツマ」にかかる枕詞「トリガナク」の成立にあたっては、歌謡の世界で伝えられて来た求婚歌の三要素と「アツマ」の地名起源説話が深く関与していたと考えるのである。

万葉集の枕詞「トリガナク」のかかる「アツマ」の用字は、「東」字4例、「吾妻」字2例、(吾妻は人麻呂と虫鷹歌集所出のもの)「安豆麻」字3例の三種であるがこの用字の状況も先に述べた枕詞成立過程を反映しているものといえるのではないだろうか。

筆者は(b)説(c)説に引かれながらそれを採らず、(d)説を支持しそれを発展させる形で右のような結論に達したのである。

〔注〕

- (1) 万葉集本文・訓読は日本古典文学大系によった。記紀歌謡も同じ大系本（『古代歌謡集』）。傍線は筆者、以下同じ。
- (2) 「枕詞の研究と釈義」
- (3) 枕詞の認定は「万葉修辞の研究」（山口 正）所収の「枕詞一覽表」による。これは燭明抄・代匠記・冠辞考・古義所収枕詞解にのせるものを基準としている。
- (4) 注(3)であげた「枕詞一覽表」を参照した。山口氏はかかる語句を「被枕句」とされる。
- (5) 「古事記上代歌謡」（『日本古典文学全集』）
- (6) 折口信夫「柿本人麻呂」（『全集第9巻、国文学篇3』）
- (7) 常陸国風土記では「我姫国」の用字。古事記（中）では、足柄山で白い鹿を打って目にあてて殺したので「中目<sup>あまめ</sup>」といったとある。

（昭和六十三年四月三十日受理）